

平成21年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

「幕末の三舟」筆の神社幟旗

「幕末の三舟」とは、勝^{さんしゅう} 海舟・高橋^{かいしゅう} 泥舟・山岡^{でいしゅう} 鉄舟^{てっしゅう}のことです。幕臣であるこの三人は江戸無血開城を実現させたと評価されて、雅号の「舟」が一致したことから「幕末の三舟」とか「維新の三舟」と称されるようになりました。

このほど、この「幕末の三舟」筆の神社幟旗が、揃って青梅市に存在することが判明しました。今までに、海舟筆と鉄舟筆の神社幟旗の存在は分かっていたましたが、泥舟筆の神社幟旗も存在していたのです。

○ 高橋 泥舟筆の神社幟旗

成木三丁目の二本竹地区にある山神社の幟旗です。

平成20年にこの地区を訪問した時、かつて泥舟がこの地区に数日間滞在し、神社の幟旗と宿泊した数軒の家の襖などに書いた書の存在を知りました。その書を見るため、同年3月の天気の良い日に再訪すると、久しぶりに蔵から出したと言って、一対の幟旗が虫干しを兼ねて、長々と庭先に横向きに干されていました。

「敬 者 道 之 根 明治三十二年九月 氏子中」

「信 者 徳 之 帝 泥舟□□□精一書」

と書かれていますが、達筆すぎて読解不能の字もあります。幟旗は各々長さ約10m、幅約1mの大きさで、重量もありそうです。墨の香が匂うかと思えるほど墨色濃く書かれていました。古老達は「泥舟は、村の数軒の家に泊まり酒食でもてなされたので、その御礼にと幟旗と襖などに書いたと聞いている。なぜここに来たのかなどは分からない。幟旗は、昭和25年頃までは、節分を過ぎた初申の日に行なわれる山神社の祭礼時に、長蔵寺の前に立てられたが、その後引かれた電線に架かるようになったので立てられなくなった。その時から、氏子である1軒の家の蔵で保管されるようになった」といいます。

泥舟は1903年に69歳で没していますので、明治32年(西暦1899年)9月に旧二本竹村を訪れたのは、亡くなる4年前になります。泥舟は、廃藩置県後は引退して一度も明治政府に仕官せず、書家として生涯を送ったとされています。この他に青梅市にある泥舟の書としては、御岳山の随身門に架かる「御嶽神社」と書かれた扁額と、その下書きの書がありますが、制作年や御岳山に来たのかなどは不明でした。二本竹地区の山神社の泥舟直筆

(裏面に続く)

の幟旗と襖などに書かれた書は、泥舟が青梅市へ遺した確かな足跡の一つです。

○ 勝 海舟筆の神社幟旗

千ヶ瀬町二丁目にある千ヶ瀬神社の幟旗です。

海舟に依頼した経緯等については、昭和 48 年 12 月発行『多摩郷土研究 第 44 号』平岡 昌一著「勝海舟の幟と額の由来」に詳述されています。それによると、

海舟は明治 14 年 9 月に、海舟の幕府海軍関係の同志であった沢 太郎左衛門の目黒別邸で、幟旗の書を紙に書きました。紙に書かれたのを布地に写したのが幟旗で、長さ約 10m、幅約 1 m の大きさです。依頼者は、当時の戸長であった榎本 政次郎と、筆者の祖父であり千ヶ瀬学校初代の教師であった平岡 阿斗之助でした。平岡 阿斗之助が沢 太郎左衛門と旧知だったので、沢氏を通じて 1 ヶ月前の 8 月に海舟に揮毫を依頼しました。ところが、「この暑いさなかに木綿地に書くのは骨が折れる。」と断られたのです。そこで、榎本・平岡両人は 9 月 1 日まで待って、紙なら承知かと再度依頼に押しかけました。そして 9 月 5 日、今度は海舟は大筆まで持参し、ごく気易く「神徳潤邦土 真心歌盈豊」と揮毫し、おまけに自ら進んで端紙か余紙へ「千箇瀬学校」と書いてくれました。

とあります。

紙に書かれた海舟直筆の幟旗のための書は、現在、青梅市郷土博物館に収蔵されています。「千箇瀬学校」の書は扁額となって青梅市立第二中学校の校長室に今も掲げられています。

○ 山岡 鉄舟筆の神社幟旗

河辺町にある春日神社・八雲神社の幟旗です。

平成 6 年 4 月「河辺老壮大学郷土史研究部会」発行の『河辺郷土史資料集』によると、鉄舟が青梅に来た明治 13 年(西暦 1880 年)9 月に「鎮守御祭禮氏子中」と揮毫したとされ、長さ 11.08m、幅 0.89m の大きさです。昭和 43 年までは祭日に氏子連が立てていましたが、電線が設置されてからは、電線に架かるおそれがあるため、立てられなくなりました。桐箱に納めて河辺町三丁目にある春日神社で保管されています。

とあります。

この他いくつか鉄舟の書は青梅市にあるとも聞きますが、御岳山上にあることは知られています。御嶽神社境内の玉垣内に立つ「^{しんざんれいどの か ひ}神山霊土歌碑」で、明治 20 年 2 月の建立です。題字は副島 種臣、反歌を添えた長歌は本居 ^{もとおり とよかい}豊穎で、鉄舟の筆ですが、この三人がどのような縁でこの歌碑に関わったのか、また、実際に御岳山に登ってきたのかなどは不明とされています。

なお、鉄舟は泥舟の義弟という関係にあります。

(文責 三好 ゆき江)